離婚しましょう旦那様

〜じゃない方の僕が溺愛されるなんて〜

「あんっ♡ぁあん♡やぁ♡だめっ♡」

ばちゅっ、ばちゅっ、ぱちゅん♡
ぐちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

「ダメといっておきながら、随分きもちよさそうだぞ」

よく通る低い声が降ってくる。

陽は高く、カーテンが開かれた寝室は明るくて、生まれたままの姿をリュシアンに晒している。
それも、ぐっぽりと下から貫かれて止められない嬌声を上げている姿を。

「ちがっ♡んぁああっ♡あんっ♡」

とめどなく与えられる快楽にずぶずぶと沈み込んでしまう。
白い結婚と言われ、手をつないだことすらなかった僕たちが、こんな……。

＊＊＊

「セラン！」

久しぶりに会えた双子の弟フィンはその腕の中に可愛らしい男の子を抱いてこちらに走り出そうとしてきた。

「フィン、危ないから走らないよ！」

慌ててフィンの元に駆け寄り、弟が走り出さないように隣に並ぶ。

「可愛いね」

ふにゃふにゃの赤ん坊はそれはそれは可愛くて。白くてまあるい頬、くるりとこちらを見上げる瞳は吸い込まれそうなほど美しいスカイブルー。
この国の王家に連なる者が受け継ぐ由緒正しき色。
そう、僕の双子の弟フィンは王太子妃、この国の王太子と結婚したのだ。

「フィンにそっくり」
「でしょ？
　瞳の色はエドヴァルドだけど顔が僕だよね」

クスクスと笑いながらメイドが用意してくれたお茶菓子をいただく。

「セランはどうなの？」
「どうって？」

聞きたいことは分かるのだが濁してしまう自分がいる。

「もう！リュシアンとの子供だよぉ！
　まだまだ二人きりを楽しみたいの？」

自分とよく似た、けれどもとびきり愛嬌のある顔が訊ねて来る。

「そうだね、いつかは、ね」

ちゃんと笑えているだろうか。フィンに心配を掛けないよう取り繕う。
なんせ僕とリュシアンの間にはそういったことが一度も行われていないのだ。
ただの一度も。

＊＊＊

つかの間のフィンとのお茶会は和やかに終わり、馬車に乗って伯爵家へと戻る。
ガタガタと揺れる馬車の中で一人になると考えてしまう。

僕と旦那様との関係。

フィンが王太子妃となることが決まったと同時に僕の婚約も決まったのだ。
リュシアン・アルダーグレン伯爵との婚約が。
僕が一方的にお慕いしていた方。
おそらくフィンから僕の気持ちを聞いたお父様が気を利かせて婚約を持ち掛けたのだろう。
フィンが王太子と、僕が王太子の側近と結婚をすると色々と丸く収まることも考えられた上での話だ。

もちろん婚約が決まったときは凄く嬉しかった。
そう嬉しかったんだ、結婚してアルダーグレン伯爵家に輿入れするまでは。

結婚式の誓いのキスは触れたか触れなかったか分からなかった。

緊張して臨んだ初夜、待てど暮らせどリュシアンは現れず、気づけば広いベッドに一人で寝ていた。
翌日からは寝室を分けられ、あの日通された部屋には二度と足を踏み入れることはなかった。

そこでようやく気づいた。
リュシアンはこの結婚を良く思っていないのだと。
僕は歓迎されていないのだと。
やはり、じゃない方の僕ではダメなのだ。

可愛くて愛嬌のあるフィンと内気で人見知りな僕はよく比べられていた。
フィンの周りにはいつも人だかり、僕はそれを遠巻きに見ているだけ。
いつしかついたあだ名は、── “じゃない方”。

だからといって伯爵家で冷遇されることはなかった。
屋敷のみんなは淡々と仕事をしてくれる。
そして僕も伯爵夫人として淡々と執務をこなす。

旦那様との会話は執務にかかわる必要最低限なものだけ。

視線すら交わることはない。

少しずつ何かがすり減っていく。
視線がどんどんと下がっていく。

“じゃない方”、やっぱりリュシアンもフィンの方が良かったのだろうか。

今朝方こっそり聞いてしまったメイドたちの言葉が思い出される。

『旦那様はいつお気持ちを伝えるんでしょうね』

そこではじめて気づいたのだ。旦那様に想い人がいるということを。

ガタンっ、と馬車が小石の上を通った衝撃ではたと気づいた。
結婚して2年、子供ができていない、離縁可能な条件が整っている。

離縁、離縁……。

旦那様には幸せになって欲しい。
僕が隣に居ては邪魔ではないか。

離縁。

うん、そうしよう。

長考している間にあっという間に伯爵家へ到着した。

考えながら足を進める。
今は執務室にいるのだろうか。
悲しいことであるはずなのに、旦那様を解放してあげられるということが僕にできる精一杯の贈り物のような気がして早く渡してあげたくなった。

コンコン

「どうぞ」

よく通る心地よいテノールが扉の向こう側から聞こえてきた。
ゆっくり扉を開きリュシアンの執務室に入る。

「お忙しいところ申し訳ございません
　お話があって参りました」
「どうした？」

書類から顔を上げることなく返事をされる。
まあ、分かってはいたが。

「僕たちは離縁をした方がよいのではないかと思い、そのご相談に参りました」

ここでようやくリュシアンの顔が上がる。
端正な顔立ちに力強い目元のエメラルドグリーンは息をのむほど美しい。

と、見とれている場合ではない。
説明をしなければ。

「僕たちの結婚はローゼンフェルト家が一方的に押し付けた結婚かと思います
　旦那様に想い人がいるとは知らず申し訳ございません

　遅くなってしまいましたが、その方と結ばれてはいかがかと思い離縁のご提案を」

“させていただきました”の言葉が言えなかった。

なぜか。

旦那様を直視できずきゅっと目を瞑り下を向いて話していた僕は気づかなかった。
いつの間にか彼が僕の側に来ていたことに。
そしてそのまま体が浮いた。

状況が飲み込めず慌てて目を開けば旦那様に抱きかかえられていた。
その状況に余計にパニックになる。

「だ、んな、さま？えぁ？あの、ちょ、え？へ？」

抱きかかえられているため暴れるわけにはいかず、されるがまま視線だけを動かす。
リュシアンは僕を抱えて迷いのない足取りで執務室に繋がっている仮眠室へと進んでいった。

ぽすん。

浮いていた体が降ろされたのはベッドの上。
いったい何が？

顔を上げ、旦那様を見上げるとベッドに乗り上げ僕へ覆いかぶさってくるではないか。

何か粗相をしてしまったのだろうか。
もしかして僕からの離縁の提案は不服だったのだろうか。
自分から言い出したかったとか？

ぐるぐると頭を駆け巡る答えのない問い。

「も、申し訳ございまっ」

またしても最後まで言葉を発することが出来なかった。
なぜか。
旦那様に口を塞がれていたから。

「んんぅっ！」

驚きのあまり塞がれた口のまま悲鳴が出る。

結婚式の誓いのキスだって触れたか触れないか分からないものだったのに。今は逃げられない。

抵抗をしていいのか分からない両手はリュシアンの肩に添えられているだけ。

ちゅぅ、ちゅっ、ちゅっ。

大きな手が僕の両頬を挟み込んで顔をそらされないよう固定している。
そしてされるがままキスを受け入れているのだが、その、息が、そろそろ苦しい。
苦しさからか、恥ずかしさからか顔は赤くなり、目に涙が浮かぶ。

そして我慢できずに新鮮な空気が欲しいと口を開けば、ぬるりと熱い舌が入り込んできた。

「んあっ？！」

こんなキスは初めてだ。
だって、こんな……。

初めて迎え入れた舌は奥へと引っ込みそうになっていた僕のものを捕らえてくるりと巻きつく。
先端から根元までまんべんなく絡みつき舌を伝って唾液が垂れてくる。
喉奥で溜まったそれをこくん、と飲み下すほかなかった。
どうしてだろう、なんだかそれは熱くて強いアルコールを飲んだ感覚に似ていた。

ぼうっとする頭で重なった唇の隙間から必死に酸素を取り込む。
少しでもその隙間を広くしたくて口を大きく開けばそれを埋めるように覆いかぶさってくる唇。

きゅっと目を瞑り旦那様の口づけを受け入れる。

ぴちゃ、ぴちゃ、くちゅ、と口内で混ぜられている唾液の音が耳に響く。
必死に酸素を取り込もうとして失敗し、鼻にかかった甘えるような声が出る。

霞む思考の中、これは夢なのではないだろうかという考えが浮かび上がった。
もしかして、僕の願望が見せた幻覚なのでは。

だとしたら嬉しいことこの上ない。
きっとこのあと、旦那様が僕を優しく抱いてくれるのだ。
子種を奥へ注いでくれる、そんな夢を見ているのかもしれない。

ゆったりと離れていく唇。
リュシアンの濡れた唇は強い色香を放ち、それを見ただけで後ろがじわりと濡れる気がした。

「だ、んな、さま……」

舌足らずな甘ったるい声。
離れて欲しくなくて手を伸ばす。
少し驚いたような顔をしていたけれど気のせいだろうか。

もう一度、そう強請るように薄く唇を開けば熱いキスが降ってきた。

ぴちゃ、ぴちゃ、くちゅ、くちゅ♡

ふわふわの夢心地で今度は自分から舌を絡めに行く。

旦那様に喜んで欲しくて、夢の中だけでもいいから僕との口づけを好ましいと思ってくれるように拙い動きで旦那様の方へ舌を伸ばす。

長い長い口づけの最中にどうやら僕は旦那様の手によって衣服を脱がされていたようだ。
大きな手のひらが僕の素肌を撫でる。
腹を彷徨っていた手はすぐに胸の突起を弄り始めた。

「ぁん♡ぁあん♡んぅ♡はぅっ♡んっ♡」

初めての刺激にあられもなく声を出してしまう。
恥ずかしくて手のひらで口を覆うとその手を旦那様が優しく払いのける。

「声が聴きたい」

甘く痺れるような声が鼓膜をゆする。
そんなこと言われたら言うとおりにするほかなくて、はしたない声を上げ続ける。

「こんなに綺麗なピンク色」

そう言いながら、じゅっ、と僕の乳首に吸いつく。

「ぁあんっ♡♡」
「可愛い」

舌先で転がされ押しつぶされ軽く歯を立てられる。
一度に経験するには強すぎる刺激だ。

「あんっ♡んぁあっ♡ぁあっ♡だめっ♡そこっ♡もう♡
　あん♡あんっ♡あんっ♡やめっ♡まっ♡んぁあ♡」

ポロポロこぼれる声はどれもこれも嬉しそうな嬌声で、まるでもっと欲しがっているみたいだ。
その証拠にしっかりと勃ち上がってしまった僕自身を旦那様に擦りつけるようにして腰が動いている。

「こんなにいやらしい子だったのか」

少し嬉しそうな声色。
そして大きな手のひらは腰からゆったりと下へ降りていき僕の小さなお尻を鷲掴みにする。
むにゅむにゅと感触を楽しむようにして揉みしだくのだ。

その度に割れ目が引っ張られ、すっかり中を潤している蜜がこぼれる。

「あんっ♡だん、なっ、さまぁ♡んっ♡んっ♡」
「ここもしっかりほぐしてやろう
　最初はくるしいかもしれないがどうか受け入れてくれ」
「はいっ♡んぁあ♡あっ♡」

お尻を揉みしだいていた手が割れ目からこぼれる蜜を一掬いする。

どうやら本当に夢のようだ。
旦那様が僕を抱いてくれるだなんて、初めてこんな素敵な夢を見ることができた。
どうか覚めないで、僕を抱いてくれる旦那様の温もりを覚えていたい。

ちゅぷり♡

しっかりと潤っていたそこは侵入してきた指を嬉しそうに迎え入れる。